

## 時流に棹さして : 論文

著者	稲津, 宗雄
雑誌名	龍南
巻	2 0 3
ページ	1 - 2 2
発行年	1927-12-10
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/8963">http://hdl.handle.net/2298/8963</a>

# 時流に棹さして

稻 津 宗 雄

## 一、序 言

無限の空間に黙々として去來する大きな「土の塊」は幾十度か生きとし生けるものに春夏秋冬を恵む。數限りない生命体はおのがじしその生存權の擁護のために一定の空間と時間とを專有して生活鬭争を運命づけられた。かくして大地は幾度その公轉と自轉とを繰り返したであらう。世紀は移る。ヘラクリトスが原始的な眼から目醒めて「パンタシー」の眞理を吐いてから万物はしかく此の地上に轉變を續けて來た。聞け萬物靜寂の深夜にすら生きとし生けるものの吐息は忍びやかに囁きかけるではないか。ものみなは生きねばならない。生きんと欲するが故にこそ自然淘汰は此等生物に進化の道程としての悲しい運命を投げかけたのである。そしてそれは……「弱き者は亡び去らねばならぬ。」といふ實に慘ましい事實なのである。が、とまれ其處には又脈々たる自然の進化があつた。人間はその進化の上に立つ。

國家・社會・階級・制度・傳統・因襲等々……人間の生活は如何に複雑な複雑したものになつたであらう。そしてしかも人間の生活は必然に思想を生み、思想は又時代と共に方法論的に展開する。展開につれて時代思潮は其處に醗酵し、それは、又その情勢に於いて紛々たる混亂を形成する。組織の形体的な側に於いても、又根柢に流るゝ思潮の精神的な側に於いても錯雜した混亂の漲らざるを得ざるは誠にこれ世紀末の姿であるであらう。

實に現代それ自身に於いては如何に物凄く、世紀末的頹廢と現狀それ自身の崩壞へ向はんとする破壊狂との交錯が演ぜられる

か。只此處に於いて先づ許さるべきは時代……思潮並に社會關係を包含する、……の必然的な進化展開である。

「現代は理論闘争の時代である。」――

「理論は辨証法的に展開する」――

種々の命題は斯くして時代意識に眼醒めんとする民衆に叫びかけられるのである。

「マルキシズム」……「ファツシズム」……その峻嚴なる對立は實に世界文化の Main Current に於ける辨証法それ自身を吾人の眼前に現出する。善惡は夙に範疇外に持ち出されねばならぬ、善惡の道德論的概念はその辨証法的展開に於いては何の役割をも有しない。世界はいみじくも先哲が慨きし霸道の巷に墮し去つた。そして社會論的傾向は滔々たる勢もて人生論的領野にまで進出して來やうとするのである。

だが此處に於いて此の末期的苦悶を解決づけるに必然道德論的出發點に立たざるべからざるを確信する我等が尊敬すべきグルツペは社會の道義的存在を主張して雄々しくも告げるであらう。

――「時代は必ず之が中心であり基礎であり根據であり且つそれに依つてあらゆる改新革正が派生すべき所の深奥なる原則を必要とする。而して我等が原則として把握せんとするは善の實現即ち道の具象化客觀化である。善の實現は勿論個人の人格に待つと共に必然歴史の一般的過程に制約を受け時代に規定せられつゝ又時代の進展の要素となつて行かねばならぬ。由來心の體は無善無惡である。その現象化し具體化するに當つて善惡の觀念は繼起する。我等は此處に於て綜合的善の實現に志し善の本質引いては善意識が如何に時代社會の歴史的一般過程に制約せらるべきかを究明し體現し把握せんと欲する。」――と。

親しき我がグルツペは斯くの如き歩みを人生につゞける。さればこそ時代意識の必然的段階として先づ吾が人生に向つて深く正しく檢討の耕作を掘り下げんとする。それはそれ自身に止まる事を許されない。明明徳と親民とが斷じて切りはなすべからざるものなるが故に飽迄社會意識の段階にまで進展せねばならない。ともあれ私は私の人生に於いて一個の正しき道德的觀念としての指導原理を培はんとするものである。何となれば個人とは收約せられたる社會であり、社會とは擴大せられたる個人なるが

故である。

## 二、問 題

寢不足の脹れぼつたい眼には余りに明るく鋭すぎる初夏の眞晝を……窓邊に枝さしかけた楓の葉にフツと紫煙の輪を送りながら靜かに冥想に耽る生活が如何に私を興行あり且つ親しみ多く感ぜしめる事であらう。恐らくは物事を何にともあれ閑却してふことの出来ない若人の誰しもさうであるだらうが如くに現在の生活をどうしても「これぞ第一義」と信じ切る事の出来ない惱みが靜もり和やまんとする心に一抹の焦燥を與へないでは居ないのが常であつた。で私は堪へられぬ不安を逃れんとして弱々しく一鎖の言葉を吐き出すのであつた。

——「誰でもいい。自分の生活に満足出來ますか。」——と。だが併し此の無意味な誰に問ひかけるかも又何を問ひかけるかも分らない不用意な言葉が果して私の心に何を反響させる事が出來たであらう。若しも又道行く諸々の人に出逢ひしなにかくの如く問ひかけたとしたら男にてもあれ女にてもあれ……如何に眼を腫り足を止めて此の狂氣じみた慘めな若者に怪げんな顔色を向ける事であらう。だが事實私がともすれば陥らうとするのは到底正常な人の眼から見れば幾分狂氣じみたとしか取れない行爲ではあるまいか。何とまあ人間は殊に又私は負ひ切れもしない位な秘密を次々に造り出してその重みに押し挫かれて我と自ら苦しみつけて行くのであらうか。

私は未だ小供であつた頃紫色の傘が非常に好きであつた。何かしら喜ばしい浮々とした氣持で雲雀の様に快活であつた私が紫の傘をかざして若葉並樹を通る折には流石に憂鬱な考へ込んだ私になるのであつた。若葉の匂に私の青春が呼びさまされやうとして居るのであつた。そして私が今や一個の成生したる人間として……一つの個性を持つた人間として……自己の存在意識を振りかへる時に私にはもう昔のあの純朴な無心な平靜な白紙の様な生活が續けられて居ないと知つてまるで泥濘に踏み込んだ様な嫌惡と焦燥と絶望とを感じざるを得ない。だけど私はかうして鈍い雨の色を見詰めながら窓邊に頬杖ついて居る時に私の魂も亦

此の冷々した雨に洗禮され淨化されるのではないかと云ふ様な氣がして……小刻みにふるう楓の若葉をうるほす銀色の雨にシンミリと見とれるのである。私は感傷に浸る事を好む。その時にはあらゆる人あらゆる物をはなれて只だに自己を抱き締める事が出来る。少くとも自分以外の物に耳をも目をも借さず只沁々と自分の姿を見詰める事の出来るのを尊いと思ふ。そして此の氣分から私は自づと瞑想に耽るのである。だがそれにも拘はらず私の瞑想はともすれば苦々しい追憶とか悔恨とかを誘つて来る。實に弱々しい傾向を表はして来る事もある。従つて不安である。不安であるから私は何か奇拔な警句を吐いて大いに鬱憤をはらしたくなる。そして奮然と私は鞭撻を私の心に加へるのである。そんな無意識な心の働きから私の前の様な言葉は吐き出される。何か奇拔な警句をと思ふ心の葛藤が到頭こんな途方もない言葉を吐き出させるのである。だが私はそれでも充ち足りない。それ程私の魂は何かを掴まねばならぬ、何うにかせねばならぬと喘いで居るのである。では何が私をしかく喘がせるのか？、考へて見るが判らない。

或人々は私を眞面目な人間よと賞讃して呉れる。だが他の人々は私を不徹底な人間だとして蔑視する。私はどれを本當にすれば良いのであらう。……………

——「それは君が所謂人間味が多すぎるからだ。人生は樂觀に限る。」——

親切な友人は私をこんなに勵まして呉れる。併し人間味とは一体どんなことだらう。「冷やかに自分の意地を押し通して……他人の事を考へてやる同情や参酌や寛容を有しない人間」を私達は往々にして「人間味の無い人間」として擯斥する。だが「人間味がある」と云ふ事は要するに漠然として居る。此の様な空漠たる概念を以てして私達は大膽にも他人を批評しようとする。しかも批評しようとする人自身既にその根據に於いて動搖して居るではないか。私は考へる。恐らく私自身を喘がせないで置かないものも此の人間の奥深く潜む動搖なのではあるまいかと。そして又私が喘いで居る……絶えず喘いで居ると云ふ事の故に或人々は私を眞面目だと云ふ様に思はれる。だとすれば實に痛ましい事に相違ない。それをしも眞面目だと云ふならば私達は眞面目であるより外仕方がないではないか。他に何んな方法を取れと先輩は私に教へることが出来るであらう。

人間の弱さ。……それについて私は考へる。私達が或一個の人格として他の人格に接して居る時……私達はその人の瞳と自分の瞳とを凝視し合つて居る時……非常な弱々しさを發見せざるを得ない。私達はどうしても笑ひ出すか眼を外らすかするより外にどうする事が出来るであらう。嬰兒の様に不思議さと敬虔さと親和さとを表はして無遠慮に他人の瞳を凝視する事は何故に私達は出来ないであらう。人間の瞳。……いともそれは神秘なものであり……あらゆる存在は先づ第一にそれを通して認識され感覺される重要なものであるにもかゝらず……純一にそれに對して驚異と敬虔とを以て凝視するだけの強さを成人としての私達が持ち得ないと云ふ事に私は大いなる奇異を感じざるを得ない。私はこれに類した弱さを數多く人の世に又自分の上に見る事が出来る。のみならず私達は段々に私達の意識や又は認識能力が完全するにつれて愈々弱々しくなつて行くらしいのだ。私は少年の日の追憶をイメージを懐しいものとして迎へる。それが今の私から見えて幸福であり平和である唯一の記憶として私に蘇つて來るからである。

——年を老るまで童心でありたい。——

私がさう思つたのは……平戸の町を歩いた古色蒼然とした古い石橋に佇んだ時であつた。その昔和蘭の商船が始めて平戸に渡來して此處に商館を築いた時……その址は今も尙オランダ塀として白壁のエキゾチックな香を残して居るが……和蘭人が當時の最新な方法によつて築いたであらう石橋の形があのダンテがピアトリチエを見惚れながら黄昏を橋桁に凭れて居たと云ふ如何にもロマンチックな聯想を起させた時である。私は橋桁にもたれて此の何の根據もない想念に浸つて居た。只私はさうする事によつてのみその時のダンテの氣持を通して私の「童心」と云ふことへの關心を不當なものであり光輝あるものだと思ふ事が出て來ると思つたからである。少しも合理的な思考ではないかも知れぬ。だが私は只漠然と「童心」が或程度まで價值あるものだと思つて居たのである。そして今や私はその時の事を追想して益々その單なる「感じ」であつたものに裏づけざるを得ない様になつた。純真な我武者羅さを失つた否失ひつゝある今日……現在の私であるが故に。……

私は父弱い耐久性のない意志に驚く。此處四五年私が自身に決意した意志は何一つとして完全に成就したであらうか。或は私

の決意が單なる底力のない人道主義的な夢想であつたのであらうか。……がそれをすら私は我武者羅になし遂げて行くドンキホーテの勇氣を有しないのであつた。私は只惰性に引きづられて行く運命の子なのかも知れなかつた。只人と論じ合ふ時には運命の絶對性を否定して人間の意志と努力とに依つて彼の行爲は實現されて行くのであつて『客觀的な力が作用して人間の行爲をその力の意志によつて規定して行くものだ』と云ふショーベンハウエルの説にも何うしても合點出來ないと主張するのであつた。

『人間は彼自身の意志を持つ。そしてそれは飽く迄も自由なものである。』事を私は私の觀念と人生觀と推理とに依つて構成する。しかも私の日々の行爲は自由であるべき筈の私自身の意志を遂行して行かない。其處に私の小さな矛盾があり私はその矛盾に氣が付かなかつた。『俺は斯うする筈だつたのだ。』と私が絶望的に思ひ出すのは私の意志が造り上げられてからかなりの歳月の經つて後であつた。その時私は不安であり従つて如何にも私自身が慘めに見えるのであつた。私は又その様な過程から何時の頃からか倫理學的命題としての『人格』と云ふ事にも問題として苦しまざるを得なかつたのである。リツプスの説く人格が究極に於いて私に何を暗示するのかどうしても明確に把握出來なかつた私であつたのである。そして結局私には極く難解な問題として残るやうになつたのであつた。

——「人間は何を目當てに何を望んで歩んで行くのであらう」——

これが問題であつた。一人切で考へる時如何に頼りなく淋しく感じた事であらう。だからして私はどうしても靜かに耳傾けて人生に力強く歩かうとする人々の聲に注意せざるを得なかつた。その聲はかくの如く語つた。

——「今の世に……大多數の民衆が少數の人間に屈服され生存權を脅威されて居る慘めな世に……一個の人格者として精神的な個別的な衆生濟度を念願しやうとも果して何の價値あり意義あるものぞ。むしろ個人としての人格者より一人でも多くの人が結盟して團體としての力によつて不合理と矛盾とを人の世から排除し解決するに若かず。

これが新時代的な考へ方として如何にも熱烈に叫びかけられ従つて實に魅力多く感ぜしめられたのであつた。此の現代の若人の

中で新人と自認する熱烈な人達が私に説いて聞かせる議論に對して私は何んな態度を取るべきであるか？ これは實に自然な尤もな問題であつたのであるが故に自然私は先づ此の考へ方に吟味と検討とを向けざるを得なかつた。そしてその結果として私が擲み得たのは次の如き考へ方であつた。

先づそれ等の人々が眞に要望する者は何ぞ。彼等が排斥する事に依つて新に獲得せんとするは何であるか……それが最初に問題である事を私は指示する。此處に於いて恐らくは、

——「最大多數の最大幸福。それが現代人の目差す所なのだ。」——

と云ふ如何にも尤もらしい答に接し得るのであらう。即ちこれをより明確に敷衍すれば、自己の幸福も性格も意志も全く無視し默殺して行爲の意圖が何處にあるかと云ふ事は問題にする事なく私が現實にそれ程大した評價を拂ふ事の出来ない觀念……即ち何はともあれ最大多數に幸福(快樂)をもたらすに役立ち得る行爲こそ誠に妥當な有意義な有價値な道德的行爲なりとする説……をこれこそ人類究極の目的なりとするものである。それは社會に幸福をもたらさんとする意圖が即ち私達の所謂道德的價値の最大なるものであり私達の行爲の準則として守らるべきものである事を主張するものであつて明らかに社會的功利主義と見做し得るものであると思ふ。其處で私は靜かに立ち止まつてそんな主張をする人の顔を覗き込んで反問せざるを得ない。

——「成程御説御尤もです。そんな風にしてミルは功利説を提唱しましたですネ。だが一体貴君自身の意志なり價値意識なりが最大多數の幸福と一致すれば問題はないでせう。又最大多數に默從して無批判に自己の人生觀や倫理觀念を變改し得るなら良いでせう。だがその兩者とも出来ない場合……即ち最大多數の幸福と自己の價値觀念と一致せず併も無條件に默從出来ない場合……には何うするのです。何も私は利己主義を主張しやうとするのではないが……此の點に先づ疑念を有します。……勿論此の間に對して默從せよと云はれるでせうネ。」——と。

それに對して相手は相變らず「最大多數」と一言にして論斷するに違ひない。此の儘行けば結局循環論法に終るであらう。だから今度は側面から考察して行く事に仕様と思ふ。



單に幸福と云ふ事から考へて見れば私は只我武者羅に自己を主張して下らなかつた少年の日が最も幸福であつたと思ふ。そしてその頃にはデオゲネスやエピキュリアンにも似た簡易生活と福利生活とを私は生活して居たであらう。かるが故に成程私達の生活は先づ幸福を意圖するものの様に思はれぬ事もない。かくして倫理學に於いて快樂説と云ふものもしかし提唱する事によつて打ち立て得らるゝかも知れない。そして私達の生活内容が先づ第一に主觀的な價值判斷に依存する限りに於いて何等かの意味で幸福を追求するものである事は争ひ難い事實であらう。此の事實を是認する時更にこれを展開せしむる事に依つて功利主義は現出する。そしてしかもミルは『ソクラテスとして不幸な生活をするが豚として幸福な生活をするに勝る』事を説く。即ち幸福の對象は個人でなく社會であり大多數の福利そのものである……即ち社會的功利主義……を主張するのである。此處に於いて一步下つて人間の行爲の意圖が果して幸福の追求であるべきか……あるかでなしに、……否かを考へねばならない。しかする事に依つて功利主義自身も批判せられるからである。由來人間の意志の動機は欲望に規定される。そして私達の問題は此の欲望を如何に合理的に、……それは社會的にも人生的にも……Control するかにある。此の動機の評價に於いて私達の意志は決定され決定された意志はその實現に依つて經驗を生み個々の經驗の体系が秩序づけられ統制づけられ一の品性の傾向が形成される。そして又此の欲望の葛藤が如何に人間をして人生苦と懷疑と不満と混亂の中に導き入れる事があらう。だが事實私達は欲望の葛藤を意識しそれに依つて行爲の動機は提出さるゝが故に提出された動機が撰擇して意志決定をする場合に私達は必然撰擇の基礎を持たねばならない。此處に何に基いて撰擇するか私の問題となつて来る。これに對して私達は直ちに道德的價值批判である事を答へねばならない。何となれば私達の道德的生活に於て追求さるべきものは此の世に實現さるべき道德的目的としての善であるからである。そして功利主義者はこれに對して快樂をもたらず事それ自身が道德的目的なる事を支持する。だが私達は實際に於いてこれに矛盾する多くの場合を見ざるを得ない。即ち高貴なる道德的理想に生くる人が猛烈にその理想の實現に努めた結果彼は最後まで不幸なる人であつたとする。かくの如き人は最も不幸なる人であつたに違いない。しかも普通人の目する所は彼を以て高貴なる人なりとするにあるであらう。之に反して只管一個の幸福の追求に努めて彼の周圍にあるあらゆる物質上道義上

の窮乏に安じて眼をつぶり其の儘の彼自身と生活とに甘じて行く人を考へる。彼は誠に幸福なる人であるかも知れない。だが私達は彼を目するに道德的偉大の名を以てする事は出来ない。むしろ私達はかくの如き人に對して前述の如く「人間味なき人間」の稱號を以てしてはしないであらうか。私は私達の道德的目的は幸福追求以外の他のものにある事を感ぜざるを得ない。がそれはさうとして上述の二例は個人的快樂主義の例に過ぎず社會的功利主義の駁撃には價しない事を注意さるゝかも知れない。だが一體功利的「快」は一般に行爲の結果として生ずる快の一例である限りにおいて快樂主義の崩壊は必然功利主義それ自身の崩壊をもたらすものであり又社會的功利主義の命ずる人類に於ける「快」の量の増進についても他人の快が直ちに自の快であるか否か問題である事を答へれば足れりと思ふ。自ら快となす能はざる事を私達が決然としてなす事が出来るとするは快樂主義自身の自家撞着ではあるまいか、實際功利主義（社會的）は他人の快に價値を置く事を要求する。併し他人の快そのものは必ずしも私達にとつて價値あるものではあり得ない。凡そ他人の快が私達にとつて價値あるものであるのはそれが私達の共感し得る人格の根柢に立つて居る場合に限られて居る。そして又外界に於ける快の價値は人格的價値を必然その條件とする。社會的功利主義はこの第二次的價値を私達に要求し私達の人間的意識が否定する所のものを私達の道德的意識に要求するものである。要するに私達の目的は只自ら善くなり又しかする事によつて他人を善くする事であらねばならない。そしてこの道德的行爲が快なる限りに於いて始めて快を追求するものであるかも知れない。

本質的に人間は慘ましい人性争闘の體驗苦を連命づけられて居る。數限りもない生命体が各々此の人性争闘の交錯に於いて等しく同等の權利を以てその個性を延ばさんとし善を享受せんとして血みどろになつて喘ぐ、各人の權利が同等であり、同様に價値あり尊敬すべきものであるが故に主張すべき正當の個性を余りにも明確に把握した人間の接觸に際しては斷つてくもない恐ろしい善と善との矛盾が起る。悲劇は善と惡との衝突に依つて起るものでなく二つの善が各相讓る事なくその立場と權利とを主張する時に起ると説く人に私は合點させられる。善を享受せんとする如何にも合理的な如何にも本質的な喘ぎが……嗚呼私達の逃るべくもない人生苦である。そして私達が此の第一義的な人生苦に於ける生活基礎の探求を投げ捨て、「最大多數の最大幸福」と

云ふ空虚な概念にその逃避を求めんとするに於いてはこれは又何と大きな paradox であるであらう。然り私は『そんな事は誰々の思想を信ずる事によつて十分に克服出来る。』と公々然と主張する人に對してそれこそ眞止なる逃避なりと斷言する。何となればその場合に用いられた「克服」なる語は正常な用語例に適つて居るか問題であるからである。『それを「克服」する事によつて誰々の思想を信ずるに至る。』と言へばまだしも是認出来ぬこともない。不用意に云つた言葉か知れないがそれには大きな誤謬が含まれて居る。苟も思想が普遍的妥當性を有せんとすれば必然忠實な認識と批判と内省とが缺かれてはならない。本來「克服」の正當な意味は、あらゆる動機・結果・意志すべてを前提としてその忠實な評價による……（あらゆる可能性を包含せねばいけない。）……意志決定によつて他の動機を否定する場合に於いて是認せられる。だが一方その言葉は……無批判にあらゆるものを捨象して只一個のみを抽象しその中に逃避する事に依つて捨象したものを pose する事。……にも誤り用ゐられる。實生活に即した問題の内省と批判とから逃避し何かの思想乃至宗教に直ちに走る傾向が若い學徒にはまゝある。そしてこれ等の人は公々然として「克服」と云ふ言葉を用いる。

——「俺はすべての私的關係を克服する事が出来た。」——と公言する。前の場合もこれに過ぎない。だがこの「克服」はむしろ「第三者への追従」であり然らざれば「<sup>ニグレクト</sup>忽緒」乃至「<sup>フレイグ</sup>忘却」に過ぎないもので斷じて正當な克服ではあり得ない。かくの如き意味の信念を誠に寶玉の如く尊嚴なる知識の神聖さと稱する事が出来やうか。若しも「否。出来得る。」とそれをしも明言する人ありとすればそれはその人自身に於いて既に認識不足を曝露するものである。それは單に……若しもそれが、正當な思想であると假定しても……その信念を形式する方法の上について云へば一の迷信であるに過ぎないだらう。私達は迷信を否定する。それは方法として獨斷であり客觀妥當を要求する私達の本能的な知識欲に矛盾するものであり又私達はより崇高な神聖な従つて最も普遍的な知識を……哲學を確立せんと欲するが故である。

此處に私は功利主義を不満なりとし、克服と云ふ事の意義を闡明した。従つて功利説を信ずる事が必ずしも尊い克服でない事を注意する。そしてその不満を解決せんとする方法即ち功利主義に代へんとすべき點についてはこれを後に譲り此處には只問題

として提出するに止むる事にする。

### 三、問 題

聯想は殆ど無關係に見える他の問題に再び飛躍する。そして遅々としたペンが鈍い論理を續けて行く中に若葉は夏を語り初めた。生命力と弾力性に充ちた天地が私の奔放な想念を天空馬の如くならしむべく地上のあらゆる空隙と云ふ空隙を占有する時若さを象徴する如くグン／＼と延びて行く名もない雜草に自然の神秘は滾るゝが如く溢れ大空の下に息吹の如く種族保存と個体保存との本能生活を赤裸々に放散する野の諸々の動物に蠢くる事のない天地創造者の言葉なき意志は嚴然として宿る。今や野を歩き里をさまよう私の眼にはあらゆる所に於いて實に數多き問題と疑念とが放射される。されど實に彼のツアラトウストラの如く速き又大いなる信念と理想とを啓示し主張するは此の哀れに見すばらしい貧書生には及ぶべくもない願望である。だが私の喘ぐ吐息の一つ一つが尊い私の生活体験の記録であり思ひ出である。新しい生活体験は古き生活体験に根據を置いて演繹せられ更により新しくより高きものへと絶えず生活を経て進軍せしめられる。

思へば私の人生への門出にあたつて私は何と云ふ獨我的な……併し無意識的な一個の存在であつたであらう。單一なる存在であつたが故に存在それ自身に對して何の意識もなく又何の觀念も有しなかつた私であつた。只私は泣く事を知つて居た。手足を動かす事を知つて居た。手足を無やみにふりまはす事によつて又聲を限りに泣き叫ぶ事によつて……それは誰が教へたものでもないのだが……實に賢明な欲望達成(意志表示)に對する手段を體得して居た事であるよ。奇しくも數限りない生命の群に包まれて個体を形成する事に對して驚く前に嬰兒は先づあらゆる官能を経て意識され感覺される外界に奇異なる眼を瞠る。無意識は意識を生み意識は先づ驚異と奇異とを感じる。節穴の如き眼は先づ光を辨別して色彩を感覺し遠近を知得し平面的な感覺より立体的な感覺へ二次元の世界より三次元の世界へ更に長するに及んでは四次元の世界へすら觀念的に突入せんとする。次元が意識内に増す如に私達の思考は愈々深刻化して行く。觸覺の improvement ない把握は段々に軟かな皮膚を通して固さ柔さ熱さ冷さ

を教へて行く。人間としての完全な一個の全体を形成する迄に私達は幼稚な馬鹿／＼しい位な驚異を幾度となく繰りかへす事であらう。感覺が refine され improve されるにつれて私達は美を知り眞を感じ善を求める。そして私達の意識の發達は必然社會環境でうものの存在の感知にまで至らねばならない。私達の社會は一の共同目的のために各個体の生活意志を包括して各個体の闘争と協和とによつて内容づけられて存在する。客觀の認識はかくして又自づから此に對立する主觀にまで批判の眼を向けざるを得ない様になる。そして主觀と客觀の合致は意識の發達につれて展開されて行く。私達は環境を認識する。そしてこれを省察するの力を賦與されて来る。そして自分に對して人を認め、人に對して自分を主張する事が出来る様になつて知らず知らず私達は一個のグループのメンバーとして資格づけられて来る。やがて個性と云ふ事を唯一の武器として紛々たる規範と制約との中に生活が始める。個性と云ふ事は私達の到達する自我意識の第二階梯である。個性はその第一階梯として思索内容の首位を占める。首位を占めるにつれて生活活動そのものを規定するに役立つ。更に逃避に際しても隠れ家となる事が出来るであらう。そして遂には自己辯護の手段としても役立つやうになる。だが個性と云ふ事が都合の良い隠れ家となつて來た頃には小つぽけな獨善に甘じない心は此處に於いて惱ましい眼を精一杯「人生」に向つて投げかける。個性が生活の眞の指導原理として不満足なるを知らざるを得ざるが故に如何にかしてこれに代るべき満足なる確信を得んと苦しむ。

know thyself! それが第一だと叫ぶ。かくて意識の分裂に不安な迷羊はニイチエの超人に走りショーペンハウエルの悲觀に求め更には大學、中庸、近思錄、傳習錄に立ち歸り……やがては遙かにカントの認識批判に達すべくもない憧れの眼を向ける。神秘は宇宙に漲り疑惑は人生に充満するやうになる。かくて、……

——「何をやるかど第一で何をやつて良いかはその次である。」——（權力への意志）  
ニイチエの言葉を痛快の極と思ひ又は

——「生存權の拋棄!! 生存の虛無!! 人生は苦惱の外に何も無い。」——（宇宙及び人生）  
魅力あるショーペンハウエルの論說に引きつけられる。

驚異が深刻になるにつれてそれに従つて思考が深刻化される。築き上げた象牙の塔を根基から破壊して又新たな努力によつてより美しくより崇高な殿堂を建設せんとする。建設より破壊へ破壊より建設へ!!かくて雑草を蹂躪り蹂躪り一本の真理の草花を培はんと努める。Solien く Solien へ絶へず私達の知識慾は進軍するを余儀なくされる。しかもかくして社會が複雑化し個人對個人の關係對立が麻の如く紛糾して來る時に solien に縛られた人間は單純を希求する。solien より ein へ逆轉せんとする傾向を感じてくる。「かうせねばならぬ。」と云ふ事は時としては苦痛である。笑ひたい時には笑ひ泣きたい時には泣きたい。そのまゝ自然に同化して飽迄無規定な奔放な生活を爲さうと憧れて來る。“Back the Nature”の叫びを上げて野獸の様に唸りながら野を疾驅して憤懣の心を晴らしたくなる。無限の大空に向つて思ふ様青春を放射したくなる。されど大空は如何に測り難き無限の姿であらう。ein も solien もはるかに達し難い悠々たる存在ではないか。かくして青天井に寢轉んだ若人はちぎれ飛ぶ浮雲を睨みながら頭を抱えて叫ぶであらう。

——「大空は無限だ。無限とより考へられぬ。だがそれなのに……おゝ我々は何と小さな有限である事よ。そして又我々の存在性の如何にも慘めである事よ。無限とは……おゝ遙かに觀念を超絶して居るではないか。何と云ふ空恐ろしさであらう。おゝ人間とは果して何なのだ。」——

彼はむしろ恐れを感じる。その昔手をさしのべて月を握らんとした搖籃の夢はかくして夜光虫の様に碎けて去る。碎けた後に夢は次々に現實に甦へる。甦へつては生きんとし生きんとしては再び倒れる。倒れても尙甦生せんとするのはげに生命の躍動である。生活のリズムである。さはれ理想とするは何者ぞ。疑は惱を生み惱は彼を苦しませないでは置かない。彼は終に新に生活革命にぶつからねばならぬ。

——「ならば人生は沙漠であるであらう。然り沙漠である。人生は沙漠であらねばならない。」——

彼は聽衆の前に立つて實にも勇敢に體驗苦を物語る。

——「おゝ。俺は何を求め而して人類は何を願はんとする。パラダイスカ。ユートピアか。かくして人類は過去永劫に渡つて問

題を愈々不可解に深遠にせざるを得なかつた。そして又永遠に此の苦惱は續かねばならないであらう。さればこそ彼等は不可知と不知の世界を分たざるを得なかつた。」——

しかし彼は説き進むであらう。だが何の不思議ぞ。その間にすら絶ゆる事なく草の葉は徐々と芽吹いて來るのである。

お、優しい草の葉。冬枯れもお前を凍え死させはしまふ。

毎年お前は崩え出て來る。——隠れ退いたその所からお前は又芽を吹くだらう。

行きづりにどれだけの人がお前を見つけ出してその微かな匂を嗅ぎ分けるか。

心細い、——けれども全くなうとは云へまふ。

お、たはやかな草の葉よ。私の血の華よ。

お前の胸におさめた思ひ通りをお前なりに云つて見る……。

——“Scented Heritage of My Breast”

偉大なるローファア、ワルト・ホイットマンは歌ふ。

——「人間が死なないものであつたら……懽喜らしい不安なものでせうな。」——

だから私はこの感想をきかされた時成程と微笑まざるを得なかつた。

しかしながら若しも人間が *Seel* に甘じて行つたら何うであるであらう。人間が社會を離れ去つて全く自由に生活するとしてら……全く動物的な生活それこそ全く自然的な生活にすら住する事も出來得るであらう。或日大學を出て間もない若い教授が何處かの教室で時たま感想を述べた。

——「私は全く社會と云ふものに縛られず自由な空氣によつて思ふ様私の文藝的興味に生きたい。それが私の希望だ。」——  
これに對してマルクス主義者を以て任ずる一人の男が次の様に反駁した。

——「人間が社會とはなれて生活出來ますか。貴方はブルジョア意識イデオロギイのとりこになつて居る。貴方の生活に不合理な余裕があればこそそんな事が云へるのです。だから駄目だ。」——

これから議論は激しく又非常に興味ある論戦になつた。藝術的關心と科學的關心との思ひがけない衝突が其處に根據に於いて潜んで居る事を知つてか否か話は枝葉から末節へと走るのであつた。一の有機體としての社會を萬遍なく同一の型に打ち込まうとする事が望むべくもない大膽さである事はその人達には問題ではなかつたのであらう。兎も角問題の性質を明確に理解しないでは此の論戦は果しないと思へない、がともあれ此のエピソードは私にとつての重大な問題ではない。只此處に於いて藝術とは効果的存在でなくそれ自身に價值と意義とを有する存在なる事を私は認めたいと思ふ。手段や方法として考へらるゝ藝術は既に藝術本來の價值を冒瀆するものであらねばならない。生活の爲の藝術・藝術のための藝術・此處に人生派と藝術派との對立も起つて來るのであらう。だが私の思索の對象は生活そのものであつて藝術に直接の關聯を有して居ないが故に此の問題の検討は簡略する事にする。又前におけるエピソードにしても前提に對する純粹なる検討がなされて居ない……正しい批判の上に立つて居ない議論であつて従つてその儘では到底結論に妥當的には達し得ない議論であると認識せざるを得ないものである。だがしかし此の様な *Sollen* にしはられない自由な生活への憧憬も何時しか私達の心に内在する様になるのはこれ又一の事實であらう。此處で話を元にもどして考へつゞける。

沙漠の中に萌え上る意識の草の葉は次々に眞理への到達を希求して止まない。止まないが故に絶へざる私達の生活批判がある人間苦がある。その人間苦の中に私達は何等かの解決を得ん事を願望する。

——「人間の**本質は機械的・自然的・鐵則に縛らるゝ**、**自然的生活を脱出して精神的**生活——**價値の生活を營む時に始めて煥乎として表はるゝのである。**」——（日本及び日本人の道）

かくの如く説いて大川博士は人間の**本質に道德的基礎が本來具備されて居る事**を主張される。Fichte の「**自然に對する理性の支配**」Kant の「**我々の衷なる超感覺者**」王陽明の「**良知**」等と云ふ觀念を肯定して元來人間は他律的のみならず自律的に *Sollen* の生活を生ずるものである事を主張される。私は未だ同博士の説を無條件に受け入れるの聰明を有しないが少くとも私達の社會的關心が暗示する所によれば人間の集團的生活は *Sollen* によつて維持さるゝものであつて、秩序とか平和とかを要するものが



人間の特質とすれば……その要素として必然に私達はSolonの生活を肯定せねばならない。人間の人間としての進化は其處にあつた、従つて人間の存在性は此の肯定に於いて意義づけらるべきものと思ふ。

私の龍南の生活の大体の傾向が此の Solon より Solon への轉向であつた。ニイチエの所謂「駱駝」としての生活から「ライオン」としての生活への誕生であつた。そして私は尙彼の最後の段階としての「嬰兒」としての生活にまで進まねばならないと思ふ。今更人生と云ふ事を喋々するは古くさいと云ふ非難を受けるかも知れない。理想主義的な陶醉に過ぎないと攻撃さるゝかも知れない。だが龍南生活に於いて我が掴み得たものは人生と云ふ大きな衝動であつたのだ。そして私はこれを問題とする事に依つてどれだけ力を感じて來たかも知れないのだ。私はむしろ此の基礎的な問題を顧みないで徒に狂奔し右往左往する人により多くの矛盾の存在を感じざるを得ない。思へば私の龍南生活の第一歩から今日迄に龍南の風潮が如何に變つて來た事であらう。だがそれは時代の趨勢として辯護さるゝかも知れない。若しそれが趨勢としては認さるゝならば龍南のモットーとしての「剛毅朴訥」は嘸や苦笑を禁じ得ないであらう。私は龍南廓清の聲が早晚揚げらるべきことを希望する。だが龍南のモットーは單なる弊衣破帽の謂ではない。朴訥は生活にある。生活を律するものが朴訥であれと云ふに過ぎない。それが徒らに形式に墮し且つそれすら廢たれて糞土にまみれんとする運命が豫感される。人生に剛毅あれ。そして苟も眞剣な生活に生きんとするものは正しい批評の上に自律的生活をつづけよ、此處で私は新英雄主義を把持する。そして私の取る生活基礎も此處になければならぬと信ずる。

其處で問題は更に生活基礎と云ふ事に轉ずる。或人はこれに對して「直覺」と云ふ事を高調する。直覺説を新しい觀念で解釋して……「人間の倫理的な生活は直覺によつて規定さるゝ。自分の生活はあく迄も自分の生活である。飽くまでも自己の直覺によつて左右すべきで他人の生活を研究する必要はない。」……と説く。

だが人間の生活態度は獨斷と懷疑と批判とに大別される。そして私達は獨斷と懷疑とを否定する。又私達の生活基礎は常に批判に依つて容觀妥當性を得る事を心がけねばならない。他人の學說を批判する事は盲從する事ではない。自己の生活内容を充實し

正當化せんが爲に生活批判の方法と材料とを攝取するものであつて此の意味で倫理學の學としての存在が肯定されねばならないのである。又此の意が教育と云ふ事の眞の理想であると思はれる。私達は教育さるゝ事によつて方法と傾向とを與へられる。此に従つて乃至はこれを合理的に展開させ或は又これを妥當的に變改して私達は自己の生活基礎を打ち建てる。本來私達の思想なり生活なりは決して孤立的な獨立的なものではない。勿論思想の主体は人格の主体と合致するであらう。が決してその体系は盡く獨創に形成さるゝものとは限らない。それには遍く人類全体の今日に至るまでに於ける文化活動が現在私達の狀態にまで人類文化を展開させたものである以上正しく私達の生活内容にこれら人類の傳統的文化が織り込まれ包括されて居ると信ぜられる。私達は私達の思索過程を明確に把握せんとする。しかする事なくしては私達は正しき信念を維持する事が出来ないからである。そして正しき信念を把持する事なくして私達の生活を意義づけ力づける事は望むべくもない事であるからである。しかるに私達は思索過程を明確に把握し検討するの必要上疑ふべくもなく客觀的批判を余儀なくされる。自我以外の非我を盡く批判の埒外に置かんとする所謂直覺説の主張はかく如くまで満足なる論據を有し得るものでない。それは徒らに獨斷的な生活、狹隘な獨善に私達を導くものである。直覺と云ふものが生來的に各人同等のものであり一切の經驗を捨棄しても尙同様の批判をあらゆる人が下し得ると假定するならば知らず事實に於いて各人の直覺は雜多なるものであり且つ又極めて不等であり曖昧であると考へざるを得ないものであるが故に私達は直覺と云ふものを全般的に信賴する事は出来ない。

私は王陽明の致良知の意義は又この直覺なる論者に甚だしく異なるものなる事を究明する。人間の道德的基礎としての良知は直覺的に人間の生活活動を作用するものでない。むしろそれは私達の道德的反省乃至檢討によつて顯現するものである。人間には七情が存在する。この七情は必ずしも無意識的に即ち直覺的に良知に規定さるゝものではない。只格物の功によつて良く戒慎恐懼する時始めて良知は致さるゝものなる事を知れば良知は單に直覺に限定さるべきにあらずる事を知り得べきである。

此處に私は「生活基礎は單にかくの如き直覺によつて把握さるゝ」との論者を忌憚なく論破し得たと思ふ。

#### 四、結 言

私は私自身の提出した問題に未だ何の結論をも與へて居ない。私の提出した問題は、大略次の四つに分たれる。

一、成人としての人間の弱さ。

二、生活基礎としての功利主義的見解批判。

三、自律的生活の主張。

四、生活基礎の存在性吟味。

しからばこれに對して私は如何なる解釋乃至結論を與へんとするか。だがこれ等の大問題に對して自己の信念として主張する事の幾分無謀であり大膽である事を私は良く知つて居る。しかし少くとも人間が思索的生活を爲す以上現在を基調した相當の思想を抱く事は當然である。そしてそれがよし貧弱な淺學なものであるとしても現在に於いてその人を律する體驗的眞理なる點よりすれば實に尊い信念であらねばならぬ。私はかくの如き信念で語り得るか否かを疑ふ。だが此の小稿の結論として私の抱く思想の一端をでも披瀝するの義務を有する。

私は私自身の生活基礎として新英雄主義を提示する。これを私は聖雄主義と名付けようと思ふ。聖は神カムフラ隨道である。天地自然の統一原理である。雄はSolonである。生活活動の意志による妥當なる規定である。此の聖雄なる觀念を説明せんが爲に私は一應前節に於ける言葉を繰り返す。

——「人生に~~given~~あれ。そして苟も眞劍なる生活に生きんとするものは正しい批判の上に自律的生活を續けよ。此處に於いて私は新英雄主義を把持する。」——と。即ち天地人三者に對する適確なるAdaptationである。時代・社會關係・生活活動の妥當なる綜合である。社會關係は時代に規定され、生活活動は社會關係に規定されると同時に社會關係は生活活動の綜合であり時代は社會關係の綜合である。此處に宇宙即自我・自我即宇宙の萬法歸一の原理があり社會と個我との相關的Contextが認知せられる。

又所謂南洲翁の敬天愛人の道も此處に於いて醗酵する。聖雄はこの共存關係を支配し萬般的現在それ自身を解決づける。(それは聖雄は個我と社會との相關を包括する事を意味する。)かくて社會は人格の擴充によつて合理化され人格の擴充は森嚴なる生活批判によつて深刻化される。社會進化和人格改造とは相即不離の關係にあり交養互發して進むべきものである。抑々『聖』の意味する「カムナガラ」とは何ぞ。即ち私達の存在がそれに於いて始めて有意義であるべき私達の國家即ち『日本』の建國的精神であり『日本』の國家組織の大本たる基礎である。それは道義の象徵であり天地の理法の顯現である。私達の生活活動はその基礎の上に立つ。『雄』の意味する *masculine* は誠に妥當なる自我の實現である。それは明明徳より親民への過程である。故に『聖雄』の進む路は要するに敬天より愛人への過程を踏まねばならぬ。そしてその過程に於いて必然『聖雄』は一切の社會現象人生現象に均等に森嚴なる檢討を向けらるべきものであらねばならない。此處に社會學としての重要性も倫理學としての重要性も共に包括せられる。私達は私達の人生苦が多分に社會苦に連關を有する事を知る。従つて人生苦の打開は當然社會苦の問題にまで進展せざるを得ざる事を知る。即ち現象論的社會論的問題に對して道德論的人生論的問題を以て基礎づける事を必要とする。否、むしろ人生論的問題の指導原理は必然社會論的問題にも適用されねばならない。それは政治は愛人即ち仁の客觀化であり人に忍びざるの情に最後の基礎を有し國民個々の人格を確立せしむることを究意の任務とするが故である。かくして私達は義憤を發するに至るのである。だから私達の義憤は決して雷同的なものでも認識不足的なものでもあつてはならない。従つてそれは又單に「最大多數の最大幸福」と云ふ概念によつて單純に一括せらるべきものでもない。その概念は派生的に肯定せらるゝ場合もあり得るけれども尚又正義を阻まんとする者に對しては實に孟子も説ける如く「雖千萬人吾行」的の強固なる信念と確信とによつて把持された生活活動そのものでなくてはならない。勿論これを保守的な頑固な反抗を客觀的普遍的妥當性に試むるの謂ひにあらずむしろ善の善たる所以のものを究明し顯現せんとする態度の強固さである事を付言する。此が第一に私が功利主義を以て足れりとなさざりし所以である。

そして又此處に於いて社會的功利主義の否定は必ずしも獨善的個人主義を意味しない事を説明する。私の論敵たらんとする人

は恐らくは此の點に逆襲の矛を向けるであらう。だが安心して良い。私の立場は毫も社會を默殺した利己主義ではない。利己は獨善である。私の探る所は獨善でなく義憤である。義憤は聖雄の展開であり必然的歸結である。聖雄は「カムナガラ」を捧持するが故に彌榮なる國家哲學としての日本精神を飽く迄も指導原理とする。私達が慥かに何の疑ふ所もなく純然たる日本民族であればこそ、經濟的關係の連鎖としてのみでない、その女の又玄なる皇國的精神の連鎖として地上に顯現し、而も三千年不斷に變動し來りし事實を聖の聖なるものとして容認せざるを得ない。此の容認が日本民族である事の徵表であり權利であり本質である事を信するものである。此の日本民族の本質としての指導原理が具象化され體顯さるゝ時にそれは民族それ自身の上に働きかけて來る。私は社會の存在が個人の存在を否定すべき何の理由をも持ち得ない。先づ全体を考へるにしても全体と云ふ事それ自身のみの存在が肯定されるか否か。全体と云ふ事はその軀幹的單位の存在を否定する事によつては斷じて肯定されない。例へば世界觀的觀念が肯定さるゝともそれ等は斷じて單位としての國家乃至民族を否定する事は出來ない。社會の階級對立に神經質な人もそれと同様に否以上峻嚴な民族對立に鈍感な事がまゝある。正義は何れにあるか。疲れた人々はおのがじし自らの正義とするものを振りまはして以て志士としての自覺に生きやうと努めて居る。そして現下の世紀末的混亂の中に正義を求め平和を求めやうとして焦る。だが私は斷じて云ふ。日本民族はその本質たる指導原理なしには即ち「日本」と云ふ一の國家の範疇を出でる事に依つては斷じて何の正義をも行ふ事の出來ないものである事を。此處に私は些かでも私の立場の明らかなる説明をなし得たる事と信する。

さて第二に生活基礎の存在性が前述の如く千里眼的直覺に内在すとの迷言にあらざるが故に必然それは獨斷を排し偏見を否定するものであらねばならない。即ち新しき時代に醗酵せる思潮と云はず傳統的精神として保守的に頑守される思潮と云はず等しく新しき時代としての眼に於いて嚴正なる批判を仰がねばならない。又此の批判と雖も頑固な保守主義者の美名として用ゐらる捨惡取善的な姑息の手段に墮し去つてはならない。何となればその捨惡取善は先入主によつて既に色づけられた手段であり色眼鏡を通して見る現象に過ぎないだらうからである。そして更にこれを具体的に平易に明瞭に云へば我と彼との完全な融合体を

造り上げんとするものでなく我によつて彼を變改せしめんとするものであり我に對する内省を顧みず只徒らに「我」と云ふ尺度を以て彼を測らんとするものである要之我を進歩改善するよりむしろ彼を我の都合よき點に於いてのみ肯定せんとする態度に過ぎないものである。かくの如きものなるが故に私達の與し難きは當然であるであらう。私達は私達の批判をかくの如く偏狹ならしめたくない。そして偏狹ならしめないためには私達はどうしても新時代に入るに當つて舊時代そのものゝ批判を忘れ去つてはならないと思ふ。

上述の如く新しき時代は古き殻より脱け出でねばならない。新時代は先入主を解放された批判の上に立たなければならぬ。だがその解放は強ちに偏見への道程を意味するものでない。偏見は古き先入見より新しき先入見への盲従に過ぎないからである。先づ赤裸になつて生活しなければならない。何となれば無はあらゆる有を包含するが故に、即ち一切の存在を包含する無に投ずる事が新しき改造を生み出だす第一歩であると思はれる。此處に第三に一つの意味に於ける嬰兒としての生活がある。或人としての弱さに對する童心の重要性が存在する。

私は劈頭に於いて明らかに告白した。

「誰でもいい。自分の生活に満足が出来ますか。」——これは私の偽りのない告白である。私は満足しない。満足は停滯を意味する。私は止まつてはならない。實に生ある諸々の存在の様に同様に私は成長しなければならぬ。私は出来上つた人間でもない。完成への道程を迎る未完成の存在である。だからして摘まれても摘まれても頭を出す成長期の芽生えの様に私は失意にば蹂躪されず又徒らに安住することもなく私はどんな細隙からでもグングンと私自身を成長させて行かなければならない。され意こそ私は私の生活に満足する事は出来ないものである。だが不満足と云ふ事は單なる自棄的な無謀ではない。人生は黒土である。如何に石コロの多い大地であらうと腕のつゞく限り一本の鍬に頼つて根氣よく耕して行かねばならぬ。人生の道程は……少くとも私個人にとつては……無限である。人類といふ一つの大きなカーレントからは知らず、私にとつては何時果つるかも知れぬ長い——旅路である。私は只専心開墾に向つて進む。そしてその道程で私が培ひ得る收穫物の價值如何が私を支配する究極目

的ではない。私が辿らんとするものは只『聖雄』の道である。それは到達すべき彼岸でなしに私の生活そのものを現在に於いて律する生活基礎である。そしてその生活基礎に於いて私が向はんとする方向は何であるか。その部門（藝術か宗教か政治か學究か）問の撰擇を考へるべき時期に私は直面して居る。私は勿論考へる。考へて居る。だがそれは一般的問題ではなく私個人の私的問題なるが故に此處に公表するの必要を有しない。

只最後に此の稿を閉づるに當つて、……私の『聖雄主義』はとかく誤解され易いであらう所の個人主義的封建的遺物に過ぎない所謂英雄主義や英雄崇拜とその内容を全然異にして居る事を付言する。

又かくの如き迷妄でなく、むしろ自身の生活を寸刻も忽にせざらんとする眞摯な生活態度そのものでありその生活態度の所以たる生活基礎の確立に存する事を又私が度々用ひた「生活基礎」なる言葉は或は適切なる用語でないかも知れないけれども、それは私達の生活現象の本体であり又生活に伴ふ批判や意志決定の基礎なるべき存在である事を更に付言して此處に擲筆する。

了